

## 霞ヶ浦の新たな外来魚ダントウボウ

萩原富司\*      \*土浦の自然を守る会

霞ヶ浦では 30 種以上の国外外来魚が確認され、少なくとも 13 種が定着している。2000 年前後に定着したオオタナゴは小野川河口を起点として、次第に生息範囲を拡大させ 2005 年には湖内全域に分布を拡大させた。2009 年 4 月、霞ヶ浦の江戸崎入りと呼ばれる湾入部で漁業を営む諸岡清志氏が、大型の強く側偏したコイ科魚類を捕らえた。体型はゲンゴロウブナに似るが、黒ずんで鱗が細かく小さな背鱗や腹部のキールは、ワタカを連想させた。その後、同種と思われる個体が 2012 年、2014 年と時間をおいて採集され、2016～2017 年には若魚や成魚が相次いで採集された。今回、これらの標本を精査した結果、中国長江水系に生息するダントウボウ *Megalobrama amblycephala* に同定されたので、形態的特徴や同定の根拠について報告する。新たな国外外来魚として増殖と拡散の早期防止対策の必要性を提唱したい。

試料は霞ヶ浦の江戸崎入り奥部の小野川河口部と高橋川河口地先に漁業用に設置された小型定置網において 2009 年 4 月～2017 年 2 月に採集された 7 個体である。*Megalobrama* 属と近縁の *Parabramis* 属の 2 属を特徴づける形質として腸長／標準体長、*Megalobrama* 属の他種との識別形質として腹鱗を起点とした側線下鱗数、標準体長／体高、背鱗第 3 棘長／頭長、脊椎骨数を計数、計測した。また腹部のキールの範囲が *Parabramis* 属との識別形質となるため、形態観察を行った。

得られた標本の体型は菱形で強く側偏しており、腸長が標準体長の 2 倍以上である。さらにキールの位置が腹鱗基底から肛門の範囲であることから *Megalobrama* 属であると判断された。本属では 5 種が有効とされているが、他種の脊椎骨数が 42 以下に対して 42～44 と多く、体側の鱗の基部が白く、両端が黒く、体側の前部から後部にかけて数条の縦縞が形成されている、という計数形質や形態的特徴はダントウボウに一致した。2009 年、2012 年、2014 年では採集間隔が長く散発的であるが、2016 年以降連続している。オンライン情報によると 2015 年に古渡橋近傍で、2017 年には桜川下流および霞ヶ浦流域で釣獲記録が掲載されており、江戸崎入りではすでに多数生息しているのではないかと推察される。

霞ヶ浦においてダントウボウは 2002 年に確認されている。本種は中国原産で 1986 年に茨城県の研究機関に研究用として持ち込まれたが、霞ヶ浦への放流記録はないとされている。霞ヶ浦への侵入経路は、これらの実験魚が飼育の過程で霞ヶ浦に逸出したことが考えられるものの、不明である。しかしここ 1～2 年で確認事例が急増しているため、新たに放流された可能性がある。本種の増殖により予知できない影響が及ぶ恐れもあり、増殖と他水域への拡散を防止するための漁業者や釣り人への周知と早期防除が望まれる。また、利根川流域の他水域に広がっている可能性もあり、生息情報の収集も必要である。

本稿は伊豆沼・内沼研究報告 11:75-81(2017)を抜粋したものであり、詳細は宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団のウェブサイトよりダウンロード可能である。